

## 第26回 「笑育」～子どもを自立へ導く関わり方～

荒巻 仁 (愛称、あらじん)

特定非営利活動法人：「パパジャングル」 理事長

平成26年2月8日



### 「笑育」～子どもを自立へ導く関わり方～

早川 皆さま、こんばんは。今日はお足元の悪いなか、ようこそ多聞の会にいらつしやいました。時間になりましたので、ただいまより第26回名田庄多聞の会を開催致します。今年度の最後の会です。今日の講師は、NPO法人「パパジャングル」理事長の荒巻仁さんです。あらじんさんと愛称で呼ばれておられます。今晚のテーマは、「笑育」～子どもを自立へ導く関わり方です。それではよろしくお願いいたします。

#### はじめに

荒巻 ただいまご紹介いただきます

した、あらじんこと、荒巻仁です。テーマは、子どもを自立へ導く関わり方と、ちよつと偉そうになっていますが、ほとんど自分の体験をお話することになると思います。そのなかで、話の99%はつまらないかもしれないませんが、1%でもいいところを聞いてもらえると嬉しいと思います。最初映像を見てもらつて、僕がどんな志事をしているか見てもらおうと思います。基本的には遊びを通して子どもを育てるということになります。僕の地元の中学校は県内であれている中学校のなかに入るので、いろんな事件が起こるなか、教育委員会や中学校がどうにもならないという4人の中学生を預かっています。授業のほかに僕と一緒に過ごしています。彼らをどのように更生させるかという、遊

びを通じてなのですね。これから映像を見てもらいます。

(映画、約4分)

今ざっと見てもらったひとつひとつの事業についてお話しできればと思うのですが、今日のところはこんな活動をしているというところまで止めておきたいと思います。

## パピジャンゲルの事業

このほかに新規事業として始めたのが、「コジカラ事業」です。子力、子どもが持っている、常識を疑うとか、自由な発想、それらを大人の社会のなかで活かしていくということ、現在実際に運営されている会社や企業で小学生が商品開発に本気で取り組む、そういう事業です。大人が子どもの力を借りるといふ事業を展開しています。非行少年更生プログラムはさつき紹介しましたが、僕たちがボランティアでただやっているだけでなくて、教育委員会と正式の契約を結んで、正式な形で子ども達の更生プログラムを実施していく。竹田の廃校施設プロジェクトは、廃校になった竹田小学校を使つて、子どもの夢と心をはぐくむ竹田の里構想、それに関して三つの提案をさせてもらっています。それらが実現に向かって動いているところです。今後は竹田小学校は宿泊施設になり、子どもの夢をはぐくむ冒険プログラムを実施していきます。そのなかで、広場があるのですが、そこに僕たちがやっているような冒険遊び場を横に別途併設して、そこでいろんなプログラムを提供し

ていく、そういうことが竹田のなかで進んで行っています。ここで、成功事例が作れば、今後県内で廃校になっていくようなところを子ども達のために解放してくださいというプロデュースも考えています。

## 絵本『あらじんの魔法』

ここに今持ってきたこの絵本には僕の生い立ちみたいなものが書いてあります。絵本にしたことによつて、虐待とかDV(家庭内暴力)などをテーマにしたところに呼ばれることが多くて、そこでは小さな時のリアルな体験なんかをお話することもあるのですが、今日はそのようなテーマでないでそのような話しはしません、過去をもっているところから、だからこそ信念を持つて自分は活動できるという強さになっていきます。

この『あらじんの魔法』の最後のページに子ども達へのメッセージが書いてあるのでそこところだけ読ませてください。

子どもたちよ

あそべー！わらえー！

いま、たのしいと おもえることに むちゆうになれ！

「やりたい！」と かんじたことは

なんでも チャレンジ しろー！

やがて それは ゆめ となる

ゆめに チャレンジする すがたは  
ひとびとに ゆうきを あたえ、  
かんどうを あたえ、  
きみに かがやきを あたえる  
かなわない ゆめは このよには ない  
なりたい じぶん  
かならず なれるんだ

いま ゆめが ない こどもたちも  
あんしんしろ

ゆめは さがしては いけない  
みつげようとしては いけない  
ゆめをもつ という

プレッシャーが  
きみを くるしめる

ゆめは いつか  
しぜんに わきでてくる

かならず そのときが くる  
たいせつなのは いま  
きみが わらっていることだ  
どんな ちいさな ことでもいい

にちじょうの ちいさな  
「やりたい！」を  
たいせつに するんだ  
その ちいさな  
「やりたい！」を みたすことで  
きみの ゆめは  
かならず そだつ

このよの すべての ひとが  
えがおで いられますように

あらじんの ねがいです

私は、夢を持ってない、やりたいことが見つからないことで、すごく苦しみました。見つからないからこそ、この世を捨てるということ、出家をし、お寺に入りました。しかしその後、初めてやりたいことを見つけました。それは絵本を読むことでした。37歳のときのことです。あれほどやりたいと思ったことはなかったですね。ひとからみれば、本当にそんなことと言われますが、純粋に絵本を読むことで子ども達が喜んでくれた、それがものすごく嬉しくて気持ちよくて、そこにいた先生が、こんなに上手に読むお父さんに初めて会いましたと言ってくれたことが、ものすごくうれしかったのですね。こんなに褒められるなんて。気

持ちがよかったですね。やってみたい、というところから。バククラブを作っていくのです。

絵本を読むという誰でもできることをやりたいと感じて、それをやり始めて、それがまさかNPOを作るとか、そこから活動する、冒険遊び場を作る、そしてそのようなことがどんどん求められて、竹田の里に入って遊び場を作ろうとか、想像も付かないことがどんどん大きくなっていくのですね。

### 夢の作り方 役割型

これが、実は、夢の作り方ではないかなと思っています。これを僕は「役割型」というのですが、小さいことを達成していくと、だんだん周りが増えてくれて、あなたたちにはできないとか、これはあなたにお願いするとか、役割を与えられるようになっていく。ひとつひとつを一生懸命やっていくことで、それがどんどん大きくなっていく。だから、僕は、夢を持つていないのであれば、目の前にあることをとにかく全力を出してやりな、そういうお話をします。やりたいことは探しても決して見つからないよ。夢は探すものではない。無理やり作らなくてもいいよ。といまの子どもに言うのと、ほとんどの子どもは夢など持っていないので、そこにまず勇気づけられるのですね。ああ、持たなくていいんだ。やりたいことがない子がほとんどなのです。だから、本気でやってみようよ。

いまかかっているしんどい子ども達は、4人みえています。どうするかという、全員就職するのです。高校に行く方がよほど楽なのですが、彼らは行かない。行けないのです。つらい道に自分が進んでいく。ミュージシャンになりたいという子がいますが、とても甘いのです。本当に。それでも僕は「すごいな、全力で応援するよ」と言って、その子を楽器屋さんに入れて行ったりするので。ミュージシャンになりたいのならバンドをやらなければいけないね、バンドやっているか」と聞くと、「やらない、ボーカルになりたい」という。「ボーカルになるにはなにしたらいい」「カラオケに行く」。その程度なのです。「それでは甘い。ミュージシャンになるには楽器もできなければ。ボイストレーニングもしなければ」。そういうことは僕は言わないのです。言わずにひたすら応援をする。「歌を人前で歌えるチャンスを作ろうよ」とか。楽器屋に行つてバンドのボーカル募集を出す手伝いをしたり。そういう一歩一歩を踏み出すことを教えて、行動することでも何かが起きるよ、ということを学ばせていくというようなことをしています。「たとえば、君がボーカルを指して、プロになれなかった場合を考えてみよう」。かれは自分の夢を語つていつもバカにされているわけです。でも、あらじんだけは受け入れてくれたと、本人はすごく驚いているのです。楽器屋にきてくれたとか、そういうことにびっくりしているのです。それまでの大人は、「はあ、高校に行かずにバンド!」とか「えっ、歌!」とか言われるというのです。

僕が彼に言ったことは、プロ野球の選手でもそうだが、100人の子ど

も達がプロ野球の選手を目指す、そして本気で高校で野球をして、そのなかで何人のひとがプロになれるのか。たぶん一人もいないかもよ、それなら99人はだめな人間なのかな。違うよね。ミュージシャンも、プロになれないと、大人はほら見るよと言うかもしれないけれど、でも、プロを目指す過程のなかで君はいろんなことを学ぶに違いない。そのなかで、たとえば、じゃー、プロになれなかったとしても、音楽に関していろいろやってきた、そこでは、プロになるにはどうしたらいいかということも、そのときには勉強しているよね。自分が大人になって、同じく子ども達が自分はミュージシャンになりたいんだと言ったときに、そんな子に出会ったときに、おまえは夢を叶えられなかったのだから、もしかしたら、この子の夢を叶えてあげたいなと思うかもしれない。そうしたら、おまえほど力になるものはいない。もしかしたら、おまえはこの子達の夢を本当に叶えたり、音楽学校を作るかもしれないよ。楽器屋を経営するかもしれない。ライブハウスを経営して歌うチャンスを作つてやるかもしれない。いろんなビジネスができる能力をそのなかから作つていくよね。だから、ひとつのものを目指してやれば、いくらでもそこからやりたいことが出てくるよ。無責任にやれというのでなくて、俺は応援するよと。

## 中学生をみる

ちなみに、彼らは中学3年生なのですよ。あと、2ヶ月で卒業するの

です。この2ヶ月がとってもしんどいからということ、僕が見ているということなのですが、僕は契約を交わすときに言っているのです。「あと2ヶ月ということはどういうことか分かりますか。2ヶ月問題を起さないかどうか見張っていることではないのです。2ヶ月でこの子達を厚生させることができるなんて、いつさい思っています。ただ、僕はこの2ヶ月間で、この子達の信頼を得られるように、ほんものの友達になれるように、がんばるということで、本当の更生支援が始まるのはその後からです。これから先、10年間、犯罪を犯さないかどうか。社会に出るともつともつ悪いことをするかもしれない。かれらは毎日が苦しいです。厳しいです。僕は面談するなかで何度泣いたか分からない。よく頑張っているなど思うのです。それくらい、彼らはがんばっているなかで、それがそういう形でしか発信できない。これから苦しいときがあれば、いつでもうちに来ればいいよ、すぐに俺に電話して来いよとか、ひとりの大人として、そのように、いつでも相談できる大人として、自分が存在できるかどうか、この2ヶ月を、僕は全力を尽くすのだと。

したがって、あの勉強をさせろ、この授業を受けさせよ、とか僕はいつさい聞きませんよと言った。この子達とひたすら遊ぶプログラムを作つて、遊ぶことを通じて彼らとここを通わせていく。そういうことをやって彼らのこれからの10年を面倒見ます。2ヶ月分しかお金はいただきません。そういう形での契約です。そうやって彼らに伝えて、これから10年、必要ならそれ以上、応援していくから一緒にやっつていこうと言いました。

学校の先生は、「あらじんさん、彼らにいくら話をしても、一緒に過ごそうとか、あるいは面談しようとする段階で彼らは絶対に話は聞きませんから」と言われた。しかし、一発で、彼らは話を聞くと行ってくられた。何でそういうことができたのかというと、僕は地元の子どもの小学校で何かしらの活動をしてきました。ほとんどの地域の子ども達が僕のことを知っている。コンビニに入れば、あとで「コンビニにおったやろう」と言われる。銀行に行ったら、「銀行に入ったやろう」と言われる。どこにいても誰かが必ず僕のいる場所を知っている、それくらい子ども達には顔を売ることができていたのです。

読み聞かせをいろんなところで毎週やらせて貰っているので、そういうことがあるのですが、それが今生きていて、ああそうか、僕はこのために絵本と出会って、このために絵本を読んできたのか。そのことをすごく嬉しく思っています。中学校の部活のコーチもやっていますが、それも彼らと出会うために始めたというのが本音です。1年後、こうやってほんものの支援が始まったというわけです。

## 自分の中学生のころ

僕、中学校の時の夢は、どんな仕事をしたいとか、やりたいこととはなかったのですが、普通に生活がしたいというものでした。毎日が恐怖の空間なわけです。暴力が一週間なければ地獄なんです。つまり、日常的にそれくらい暴力があるので、一週間空くということとは、もう

起きる、もう起きるといふ毎日なんです。一週間起きなかったからもうない、のではないのです。一週間起きなければ、明日かな、明日かなとカウントダウンに入るので。だから、怖くて仕方がない毎日なんです。すべてが怖いのです。音とか、電話の音とか。何か音がすると、もう恐怖なんです。だから、暴力が終わった直後が一番安泰なんです。「終わった！」というのが一番の幸せの瞬間だったのです。

毎日ご飯を食べる時間とか、そういうあらゆる空間を幸せにしたいというのがあつて、僕は妻に愛される夫になること、子どもに愛される父親になること、そして、毎日笑顔の絶えない家族をつくるのが夢だったので。結婚して子どもが生まれたその日が最高の日だったので。自分の家族、子どもを持ったという事で、まず、妻にもすごく感謝をしたのです。想像を遙かに超えたくらい感謝したのです。そんな嬉しかったのにありがとうとは言えなかったのです。

なんでありがとうが言えないかというと、いいわけかもしれないですが、僕は心にもない言葉を子どもの時から使いすぎているのです。お父さんの機嫌を取るため、ありがとうといっぱい言いました、大好きだよといっぱい言いました。大好きだと思つたこともないし、ありがとうとも思つたことはないです。早く死ねとか、くたばれとか、そんなことしか思っていないのに、そのような言葉を使う。つまり、本当に感謝したいときとか、本当にありがとうとか伝えなければいけないときに、僕がそれを使ってしまうと、そのことばによって僕はうそになつてしまふ。本当は感謝しているのに、ありがとうと言つた瞬間に感謝してない

よ、となってしまう。そういうのが心のなかに働いてしまって、もうことばに出せなくなるのですね。使えなくなる。ことばを発するというところにすぐく葛藤があった。

### 妻への手紙

でもこのときだけは、伝えることができないほど感動してしまったのです。そして、結局、この場では言えなかつたけれど、言えないから手紙に書くこうと思って、そのときそばにあった紙に書いて次の日に渡ししました。ありがたうを伝えたいだけだったので、手紙もいいことを書いて喜ばせようとかでなかつたので、一分とかで書いてしまった手紙です。

14年前の手紙をまさか人前で読むようになるとは思ってもしなかつたのですが、いま、お父さんの応援とかをしているなかでこの手紙を読ませていただいています。読んでみたいと思います。

(音楽が流れる)

「偉大なる母、ゆうかへ。やった、とうとう勇仁が生まれた。2520グラム、ちよつと小さいけれど大きく育てよう。今日は家に帰ってきても涙がとまりません。ありがたう、ゆうか。ごくろうさん。この一言に尽きます。やつぱりすごいね、母の力は。母子ともに元気で本当によかつた。ゆうか、今日は本当にがんばつたね。本当に、本当に、本当に、ごくろうさん。そして、ありがたう。」

勇仁へ。勇仁、やったね。6月にお母さんが妊娠していることが分かっ

てから、早く会いたくて仕方がなかつたよ。おまえは、2520グラムと小さい子だけれど、大丈夫。勇仁はお父さんとお母さんの子どもだから。運動神経がよくて大きな身体の子になるよ。勇仁、おまえが生まれてくるとき、お母さんは本当にがんばつたよ。すぐく痛がついてけれど、勇仁のこともすぐく気にしていた。勇仁も痛いね、ごめんね。勇仁が大きくなって自分に子どもができるとき、お母さんの偉大さが分かるように。だから、勇仁、お母さんの大好きな子になってください。そして、お父さんのことも大好きになってね。とにかく今日は勇仁が無事に生まれて本当によかつた。やった、父より」

勇仁はいま中学一年生なんですけど、子どもにも何かを求めているのでなくて、僕はただただ笑っていられる姿が無性に嬉しくて、「本当にお父さんってばかやね」と妻に言われるくらい家庭のなかでバカをやっている毎日笑いが絶えないのをずっとやってきました。そのなかでいま中学生になつて、もちろん反抗期もむかえ、反抗的な態度を示すのですが、それが嬉しいのです。すぐく嬉しいのです。だって、僕、全く反抗できなかったんです。一生懸命機嫌を取るといふことをずっとやってきて、いまでもやっているのです。2年間父親とは話をしてなくて、いま電話がかかってくるんです。「お父さん、ごめんね、2年間も連絡しなくて」と心にもないことを口にしてしまうのです。中学生の子どもがそれをやらずに、自分の感情を親にぶつける、それがものすごく嬉しい。僕にとつては、長男も次男も三男も最高の子どもに成長してくれているのです。

## 「おとうさん」と呼んでくれる

僕は父親のことを「お父さん」と呼ばなかったですね。認めたくもなかったし。子どもがものすごく簡単に「お父さん」とよび掛けてくれるじゃないですか。その瞬間に感動のスイッチがぱっと入るのです。この子が僕のことを「お父さん」と呼んでくれると思うと、俺ちゃんと子育てできているかもって、どつと感動のスイッチが入ってしまい泣いてしまうのです。それを見て妻は「あんた何泣いているの、いまだこで泣いたの」というのですよ。「いま、お父さんと言われて泣いた」。「はあー」ていわれる。「お父さん」と呼ばれただけで泣いているって、普通の人には異様な光景ですよ。子どもには、ほんとうにいろんなことを教わって、子どもが景色を見て「きれいや」というのを聞くと、本当にきれいな景色やと初めて気づいたりするのです。自分はこれまで美術品や景色を見て、きれいと思ったことなかったなど。僕は景色をみて綺麗と口にすることができるわが子をみて、純粹な心でちゃんと育っている、と感動してしまふのです。誰もが当たり前だと思っていることが、自分には当たり前ではなかった。だから小さなことに大きな感動をした。「おとうさん」と呼んで貰えることはものすごく奇跡だし、きれいな景色を見てきれいと感じるのは本当に奇跡なのだ。そういうことを感じる事ができる自分は人よりも幸せなのかもしれない。そう思っています。

(音楽やむ)

## 現代の子どもと遊び

両親学級とかの講座なんかもさせて貰っているのですが、一歳までの関わりが思春期の子どもの関わりにもものすごく役に立つのです。一歳までの関わり方と中学生との関わり方がめちゃくちゃいっしょで、むしろ、一歳の子に関わるように関われば中学生も心を開いてくれます。そういう経験をしています。それで、一歳までの子育てがんばらにゃいかんよと話しています。

現代の子どもは、意欲の低下、自信の喪失、夢や希望がない、自分で考え行動することが苦手、冒険しない挑戦しない、失敗を恐れすぎる、仲間行動苦手、等、このようなことが国の白書などでも取り上げられています。実際子どもに携わる仕事を長いことされている方は、何十年という長い経験のなかで、昔の子どもと比べると全然違うよね、と感じておられると思います。でも、子育てをしている世代とか、親御さんとか、若い先生方は、そういう経験がないので、いまはこうだと言われても分からないのが実情です。いまの子は何でこうなのということは、子どもの責任でなく大人の責任です。だって大人はすぐに無理って言っじやないですか。そうすることによって、子どももすぐに無理って言います。

AKU(危ない、汚い、うるさい)、といいますますが、それは大人にとつてのAKUです、AKUと言っても、子どもが本当に成長していく、チャレンジ精神を持つということとは、危ないことにチャレンジする、汚いことをやる

て自分のやりたいことを見いだしていくことなので、うるさいのは元気な証拠ですし、そういう言い方で、目の前の小さなことをだめと言われてやめていくと、将来の大きな夢を育てていくことができるのだろうか。けんかのはだめ、それがどのようなものであっても。何時間も勉強しても100点を取らなければ褒められない、こういうのはものすごくしんどいんですね。過干渉、何でも親が先走ってやってしまう、手を出してしまう、指示ばかり、子どもに自分で考え行動するという機会を奪っていく。

### 「わくわく・得意・役立つ」

ゲーム、携帯、スマホ等の悪影響は中学生と関わるようになってから特に実感するようになりました。引きこもりとか不登校とかは、この世にゲームや携帯がなければ90%すぐに解決すると言われていたそうです。これは夜回り先生の水谷先生がおっしゃっていたことです。いまや一人の時間が快適と思うようになっていますが、昔は学校を休んで家にいたら、ああやることがない、つまらん、学校でも行くかだったのが、いまは一人でいても心地いいことができますから、スマホをいじっていたら飽きないですし、そういうやりたいことを家にこもってやってしま

う。子どもは役割を感じることができたらそこに居場所ができる。役割を感じる、居場所を作るということが、なかなかできていない。僕がや

っている遊びや中学生の支援は、彼らに役割を与える、役割を感じさせる、それによって居場所を持たせることができます。キーワードは「わくわく・得意・役立つ」です。つまり、毎日わくわくさせるといことです。いま見ている4人の子ども達が初めて口にしたことがあるのです。「学校が明日から楽しくなる」と言ったのです。それを聞いて、先生もびびりましたし、教育委員会もびびりましたし、校長もびびりました。明日から学校が楽しくなる、なぜかというところ、あらじんが遊んでくれるから、なのです。いままでは苦痛だったのです。学校しか居場所がないのだけれど、学校に来ても授業には出ないし、徘徊するだけで、器物破損か教師に対する暴力かどっちかしかなかった。彼らは楽しいと思ってるわけではないのです。明日からは楽しいことが待っている、ということわくわくしているのです。そのなかで役立つことを経験させるのです。そのまえに、得意なこととはなんやと訊く。得意を引き出すのです。歌を歌うことだとすると、そこから枝葉を伸ばしていくのです。その得意なことをアピールできる場を作ってやる。自分が得意なことが、実は誰かの役に立つということを経験させるのです。そうすると、自分の役割を感じて、そこに居場所ができていく。「わくわく・得意・役立つ」のステップのなかから、役割を見つけて居場所を見つけさせる。

いまの子どもは、「意欲の低下、自信の喪失、夢や希望がない、自分で考え行動することが苦手、冒険しない挑戦しない、失敗を恐れすぎ、仲間行動苦手、等」と言われていますが、これがなぜおきているか

ということを、これから一緒に遊ぶことで体感してもらいたいと思います。

### 遊び力テスト、コミュニケーション

参加者が一人ずつ鉛筆を持つ。鉛筆を両方の手の親指と人差し指とではさみ、「いただきます」の形になるよう、一回転させる。子どもにさせる場合、これができた子からご飯食べてもいいですよ。食事2時間前にこのゲームをするので、子どもによつては時間がかかる子もいるが、みんなご飯の時にはできるようにする。

(鉛筆を用いた遊びを実際参加者が行った)

**荒巻** これは遊び力テストというもので、実はできたかどうかは大事でなくて、気づいて欲しかったのは、できない方が得をしているのですよ、ということ。なぜかという、できないひとはできるまで遊ぶことができるからです。できた子は家に帰って、「お母さん、食べる前にすることがあるんやで。箸をこうやって回してきたら食べられるのやで」と言うかもしれない。家族に自慢すると、このような遊びは二度とやらないと思います。できなかつたひとは、お箸や鉛筆を見るたびに、遊ぶことができるのです。だから、遊びはできない方が面白いということ。簡単にできてしまう遊びには子どもはいつさいわくわくしない。逆にいえば、いまの子ども達は簡単にできるものとか、できることが大

前提にあるような遊びをいっぱいしているということです。子ども達には、できないことが楽しんだよということを感じてもらおうことが一つです。

今できなかった方はきつと思つたに違いないと思うのです、「あいつ、前で何か言っているけれど、もつとちゃんと教えるよ」と。しかし、子どもに教えようとするとな怒られるのです。「教えん」と。「いま、やれといわれてやっているんだ、もしかしたら、こうでないかと、いま思いついてできそうなのに、答え言われたら腹立つわ」。子どもは教えたなら怒るんです。遊び力のあるひとは、できないことをずっと楽しむことができるひとは、遊び力のないひとはできないと思つたらもうそれ以上やらないひとは、いまの子どもは、遊び力のない方に進んで行つていく。これが、意欲の低下とか自信の喪失とかになつていく。

いまやっているなかで生まれたものがあります。それは表情です。わくわくしたひとはこやかな顔になつたかもしれない、できなかったひとはなんやこれといった顔になつたかもしれない。表情が生まれたという事です。いまの子ども達は元気がないと言われます。元気がないとは、どういうことかという、「わー、きゃー、かー」といつているのが元気なのではないのです。表情があるというのを元気があるというのですね。普通に子ども達が遊んでいるときに、だまつてもにこにこしながらやつていたら、元気があるととるので、表情が生まれる遊びをしていくということです。

そのほかに生まれたものがありますね。コミュニケーションです。ごく

自然に、「どうやるの」とか、できたひとは「こうやるのや」とかになつていく。子ども達のなかに、いま、コミュニケーションがないとか、コミュニケーションをとるのが苦手だとか言われますが、ごく自然にコミュニケーションが生まれる遊びをたくさんさせてあげないといけない。

学童保育については、僕のところでは、先ほど写真で見てもらったように、子ども達が秘密基地を作り、落とし穴を作り、そういうことを遊びのなかで自由にやっっていく形なので、必然的にコミュニケーションができていきます。ところが、普通の、学童保育は部屋のなかで、安全・安心のなかでやることは決まっています、ブロックを黙々と積んでいく子であったり、宿題をする子であったりとかなので、なかなかそういうコミュニケーションが生まれにくくなっています。

### (もう一度、遊び)

二人ずつ向かい合つて、ペアーを組んで、各自が手を打つてその後、相手の右左の手のひらを互いに合わせる。これを15回失敗せずに無言で繰り返す。練習した後、一度だけチャレンジする。「早くてもゆつくりでもいいですよ」と説明。参加者全員が試みる。失敗したら、その場でやめる。完了した。ペアーも全員が済むまで無言で待っている。終わった後、次にペアーの相手を変えてもう一度同じことをする。

ペアーを変えてやった後、「一人目がやりやすかったですか、二人目がやりやすかったですか」と質問があった。

**荒巻** 答えられませんよね。あのひとの方がどうのって、けんかになりますね。それはしませんが、違いがありましたね。一人目と二人目は、

そんなに早くしなくてもいいのとか、そんなに強く叩かなくてもいいのとか。要するに、ひとが変わればやり方も変わる。相手が変わればやり方も変わるので、それに合わせなければならぬ。そのときに、自分がどのような役割をするかですね。ひとは自分がリードして、あんた私に合わせるよとするか、もうひとつは、あのひとがこう来るのだからこう合わせていこうか。こうやって、相手が変わると自分の役割が変わる。リードするのかそれに合わせるのか、こんな簡単な遊びのなかでも皆様は感じたはずですね。

ところが、いまの子ども達はひとはそれぞれ違うのだよとか、そういうことを認められずに来た。ひとは違うのだという大前提があるのにそこに気づかずに来た。そういうことが前提にされていないという現状があります。さっきの遊びの場合、共通の目標があったわけです。一回も失敗せずにたった一回のチャレンジで15回やりきるぞと。二人の共通の目標があったのです。だからこそ役割が生まれたのです。

子どもがいたときに、僕たちは、「じゃあ手を組んで、手を合わせて、さあやって見よう、・、・、そらみんな違うだろう」というようなことは一切言いません。こんなことはいちいち言わなくても子どもは普通に感じられるはずです。どうやったら感じられるのかと言えば、さっきみたいに、自然に遊んで、自然にコミュニケーションが生まれ、自然に表情が出る、そういった遊びをすれば、こういった個性の違いとかも、子ども達は自然と感ずることができる。つまり、落とし穴を作ったり、秘密基地を作ったり、鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたり、そうすること

で「こういうことが分かってくるのです。」

## 雪合戦

この間雪合戦をしたのです。その場合、僕は雪合戦をしようと言われ、いややと言ったのです。なんでいやかというのと、痛いから。当たったら痛いではないですか。だから、いやと言った。子どもら、氷みたいなかちかちの玉を作って投げてくるので、当たったらめっちゃ痛いんです。「おまえら、本気だからいやだ」と。そしたら、「どうやったらやってくるんや」というから、「痛くなければいいよ」と言った。すると、こんなかと、ふわーとやるんです。全然面白くない。こっちもあつちも。こんな雪合戦しても面白くないから、じゃー、本気でやるかとなったとき、「俺、当たったら痛いのいやだから。でも、本気でやるということとは、当たったら痛い。だから、痛いのを大前提にしよう。おまえら、やるやつは、入れてやるけれど、当たったら痛いということを絶対忘れるなよ」と、約束するのです。そうしないと、誰が当てた、誰がけがをしたのとなる。そのかわり、それだけ痛いものだから、自分で気をつけて雪玉から絶対目を離すな。そう言ってやるんです。つまり、危ないことをするときに危ないからだめだというのでなくて、危ないことに最大の注意を払いながら遊びなさいということを最初に言って雪合戦を始めたのです。

始めますと、5年生や6年生の高学年の、野球をやっているやつやド

ッジボールのうまいやつはがんがん投げってきます。こんなの当たったら本当にたまったもんでないです。ところが、アラジンチームには、1年生や2年生や3年生などがいるから、当たるのです。当たると、痛い痛いといいなから、それでも、その子達は注意を払いながら遊んでいるので、当たったら、痛いで済むだけなんです。そういうことがないと、不意に当たってけがをしますが、注意をしながらやらないとけがをしないとということですね。

向こうのチームの高学年の子は、僕に投げるのと低学年の子に投げるのが明らかに違うのです。低学年の子には、そっと当てていくのですが、僕には、がんとやらないと、もちろん当たらないので、そうやってきます。低学年の子と僕との違いを遊びのなかで認識しているのです。投げる強さも考えて、その子達に合ったような投げ方で投げてくる。遊んでくれるのです。小さい子ども達は彼らとまともに勝負をしたいのです。アラジンチームと高学年チームは勝負をしているのですから、勝つという共通の目標がある。チームとして勝ちたいのですから、何らかの役割を見つけたい。最初は投げるのだけれど、自分の投げる玉がいっこうに届かない、当たらないことに気づき出すと、「あらじんに投げてもらう方がこのチームは強いぞ」ということから、この子達のなかから、雪をかき集めてくるやつ、雪玉を作るやつ、それを運ぶやつと、勝手に分担していくのです。何もいわないのに仕事を分担する。なかには、相手の陣地の裏に回って雪玉をかつさらってくるものもいる。それぞれが何らかの役割を演じ始めるのです。見ているとめっちゃくちゃ面白いです。

子ども達は、チームのなかで居場所を見つけることができるようになっていく。

### キャンプでのカレーライス作り

さつき、キャベツの千切りが得意な子の話をしましたが、これもそうなんです。たとえば、子ども会でもいいし、僕らのようなNPOでもいいのですが、キャンプをしますね、そのときカレーは定番ですからカレーを作ります。僕たちも非行少年の最初のプログラムはカレー作りでしたね。なぜカレー作りかというと、カレー作りのなかには居場所を見つけ、役割を見つけることができるからです。このことを知っている団体と知らない団体とはカレー作りのやり方が変わってくるのです。外から見ただけにも変わらないのです。要は大人の介入の仕方なのです。役割の見つけることのできるカレー作りというものは、子ども達が野菜を切ります、にんじんを切ったりじゃがいもを切ったりします。そのなかで、子ども達の前に、カレーができましたと出てきたときに、子ども達がまず最初になにを見るかというと、自分が切った野菜を見る。ジャガイモを切った子はジャガイモを見る。にんじんを切った子にはにんじんを見る。ご飯を炊いた子はご飯を見る。そして、このカレーのなかに自分のしたことを見つける子どもは自分の居場所を見つけることができるのです。

このような話は、ものすごく大げさな話なのかもしれませんが、子

どもの居場所作りはそういう日常の小さなところの積み重ねなのです。だから、おうちの手伝いもそうなんです。うちは、おせちを我が家で作るのですが、末っ子の5歳のこの役割は、こんにやくに切り目を入れるてくるつとひっくり返すこと、それだけです。妻方のおじいちゃんおばあちゃんとおせちのふたを開けたときの第一声は「こんにやくを見てください！」だったのです。「これ見て！、これ僕がやったん」。自分の役割のアピールなんです。「うわー、これ作ってくれたんか、あんだ、すごいな！」と言われて、その子は家族のなかの居場所を見つけるのですね。

ところが、キャンプに行くと、普通に乱切りしたようににんじんはダメと言われるのです。なぜかというと煮えないから。短時間で煮て食べるには、もうみじん切りでもいいといわれるのです。そういうところで、乱切りした野菜が入っていたとすると、当然煮えないので、そういうのを見た大人はみなきさんでしまうのですよ。「ありがと、ありがと、うね」と褒めたあと、こんな煮えるわけないだろうと、細く切り刻んでしまうのです。そうして作るから、できあがってきたときに、子どもは「あれ、僕切ったはずのににんじんは・・・」。もう切ったときの形としてのにんじんは残っていない。これも大げさな話かもしれませんが、大人がよかれと思ってやったことで、子どもの居場所を奪い、役割を奪っているということが世の中にはたくさんあるのではないかと気がつきなんです。子どものために子どもの成長を止めていることがいっぱいあることを、大人が感じることができればなあと思っています。

## ゲーム機

相手が変わると自分の役割も変わるといいますが、相手が違うので誰と組むかによってそれぞれ違う、感じ方も違う、そういうことが子どもに感じられなくなっている代表例が、携帯電話とかゲームとかそういうものです。

たとえば、DSですね。友達と一緒に集まってDSをしています。「おまえのDS、貸してや」と、DSを借ります。「おまえのDS個性きついな」とか、「おまえのはおとなしいわ」、「ふにゆふにゆと、なかなか反応せんで」など、DSによって違うことはあり得ないですね。全部同じ反応をする。どの機器を使っても反応は同じ。自分がボタンを押せば反応してくれる、自分が求めることに対して期待どおりの答えを出してくれるのですね。だから、相手が人間になって自分が思っていること、たとえば、「俺がこう思ってるのに、なぜ、おまえはこうせーへんのや」となる。ゲームばかりしている子は、自分の要望にずっと答えてもらっているの、答えてくれないものにあつたときに、すべてを相手のせいにする。いまの子ども達のもひとつの特徴として、自分ができないことを相手のせいにしてしまう。だから、遊びはとつても大切だと思います。

「やりなさい」でなく「やりたくない」

「育成とは？」ということですが、僕は、子育てもそうだし、**コデカラ**

事業でもそうだし、僕はよく言うのですが、社員育成と子育ては一緒ですよ。

平凡な教師は言つて聞かせる。(指示をする)、よい教師は説明する、優秀な教師はやつてみせる。しかし、最高の教師は子どもの心に火をつける(ウィリアム・ウオード)。つまり、教えずして、自分の望むことをどうやつて彼らがやつてくれるのか。そこをやつていくということですね。「やりなさい」でなく、「やりたくない」関わりであると。

部活指導をしているとも言いましたが、こういうことを練習にいつばい取り入れているのですよ。たとえば、バレーボールですが、スパイクの스팅を覚えさせたいときにどうするかというと、こうやつて打つのだとか、手はこう使えとか、教えるのでないのですよ。ダンスを覚えさせるのです。振り付けを覚えさせる。(腕をくによくにやるダンス)。肩の関節、肘の動き、手首の使いなど、順番に動きが伝達していくのを、ダンスで体感させるのです。ダンスを毎日踊っているうちに、知らないうちにスパイクのホームが身についているのです。つまり、いちいち教えられたらうつとしいのですが、ダンスは楽しいから、気づいたらスパイクのホームを身体が自然に覚えていきますよ、というもつていき方なのです。こういうのが、子どもの心に火をつけるやり方ですね。

靴箱に靴を直さない、という学童保育がありました、この子達に靴を直して欲しいけれどもどうしたらいいか、スタッフ会議のなかで、「はい、靴を直して！」「はい靴！」「と言うようなことはやめましょうとなった。やりなさいと言つてできていない現状があるのだから、「やりなさい」は

言わないでおこう。ではどうするのか。玄関が汚いのがいやなのなら、玄関を常にきれいにしようという作戦なのです。靴をみんな脱ぎ捨てているので、それに気づいたスタッフが片っ端から片付ける、下駄箱に放り込んでいけと。それをやったのです。そうすると、玄関は常にきれいですね。こどもは、自分が脱ぎ捨てた靴が下駄箱に入っているのに気づきます。そして自分の靴がどこにあるのか、自分で知っておきたいという心理があるのか、入れるようになったり、あるいは、脱ぎ捨てる靴が自分だけなら、これは入れておかなければならないなと思うのか、すぐにきれいになったわけではありませんが、半数以上の子どもが、何も言わないのに下駄箱に靴を入れるようになりました。

### 褒めない、叱らない、STEP理論

このポスターは平成25年9月16日、ユーアイ・ふくいで開催されたときのポスターです。この日は嶺南で水害がありこちらの方はほとんどがキャンセルされて来られなかったのですが、とつてもいい催し物でした。どんなイベントだったかという、3人の先生を呼んで、僕は完全な裏方でしたが、これらの先生方に生徒と先生の感動の物語をしてみたら、そういうイベントでした。このイベントは、僕は、感動するのに自信があったので最初からDVDにしてあったのです。4時間半の収録で、1000円で販売しています。

そのなかで、「褒めない、叱らない、STEP理論」を展開される折笠

国康先生がいらつしやいます。折笠先生は大反響があったので、またお呼びしました。8月30日、福井のアオッサです。STEP理論のSTEPとは、全国的に知られつつありますし、各会場では講習もされています。どういふことかという、親と子が良好な関係を築くための子どもとの関わり方です。褒めたらダメなんです。叱つてもだめ。僕は子どもとの関わり方は百万通りあって、これは百万通りのひとつだと思つていますが、この一を知ると知らないとは、子どもとの関わり方が違つてくると思います。何かというと、褒めることにも危険性がある、叱ることにも危険性がある。それでは、STEPとは何かというと、勇気づけをするということです。勇気づけとは何かというと、相手が感じていふであろう感情をこちら側が読み取つて、それを言葉に出してフィードバックするといふやり方です。

テストで百点を取つた子どもが「あらじん、百点取つたで！」とプリントを持つてきたとします。「おお。百点か、偉いな！」とか「すごいな！」とか言えば、褒めることになるからしないということ。じゃあ、相手の感情を読み取つて、それを言葉に出してフィードバックするとはどういふことかという、なぜ、この子は僕に答案を見せたのだろうか、それは「嬉しい」ということですね。「おお、百点取つたのか、嬉しいんだな」と、それだけです。これ以下でもこれ以上でもないというのがSTEPの考え方です。でも、たったこれだけで子どもはどのような心理状態になるかということなんです。アドラー心理学が元になつたSTEP理論です。この一言で子どもはすごく勇気づけられる。褒めているの

と何ら変わりが無い、むしろ褒めるよりもいい。

ただ、僕のなかではめっちゃくちや褒めたいこともあるし、叱りたいこともあるし、叱ることはあんまりしません、褒めることはよくやります。非行少年との関わりの中なかで、褒めてくれアピールはすごく多いですよ。それを受け取ってこちらが褒めることはしません。その子がこういう感情で迫ってきているなというときは、その感情をフィードバックする。

僕は迷わないということがあると思います。怒るのも叱るのも勇気づけるのも迷わない方がいいと思います。この子にとつて、いま、怒った方がいいのかな、褒めた方がいいのかな、と迷うのは、ちよつと違うなということがあります。自分の感情、そのものを子どもにぶつけられたらいいなと思います。ある程度感情がコントロールできるひとが、そのとき叱りたい、褒めたい、勇気づけたいと思つたとき、それをぱつと出せる、それがいいと思います。子どもと接しているんなパターンを経験していくなかで、このステップはものすごく役に立つなと実感しています。

よく、パパママ教室では、このステップは学ばなくてもいいよと言つて、勇気づけて、一歳までの子どもにめつちやするでしょうと。一歳までの子どもは言葉がしゃべれないから、泣いている子がいると、「おなかすいたんやね」と言うじゃないですか。「ああ、眠たいんか、そうかさうか」と言うじゃないですか。これは、お父さんなりお母さんなりが、この子は眠たいんやなど、この子の気持ちをフィードバックしているので、すね。そういう場面が一歳の子どもの子育てでいっぱいあります。これ

が勇気づけです。すね。

### 物語『強い子』

感動のお話のなかで「強い子」を聞いてもらいます。中学生も小学生もそうですが、いい話をできるだけいっぱい聞かせてあげるのですね。

(音楽始まる)

これはある難病の女の子のお話です。女の子は進行性の病気で入院して、頭や身体のおちこちに器具が取り付けられています。大きな手術が必要で、うまくいかなければ命を落とすこともあるそうです。お母さんはそんな彼女を見ると悲しくて仕方ありません。どうしてうちの子がこんな姿に。女の子は大好きなお母さんを元気づけたくて、お見舞いに来るお母さんをいつも笑顔で迎えていました。女の子は童話を読むのが大好きで、自分でもよくお話を作っていました。そして、お母さんのために「強い子」というお話を作りました。それは彼女が生まれる前の話です。

ある日神様に呼ばれていくと、赤ちゃん達がたくさん並んでいて一人ずつプレゼントをもらっています。あの町に生まれて、この町に生まれて、神様はどんな願いも叶えてくれるのです。女の子の順番が来ましたが、何が欲しいか決まっています。ふと見ると、神様の後ろに重い病気というプレゼントがあります。「これは誰がもらえるの」。「一番強い子だよ。このプレゼントをもらった子は生まれてからずっと苦

しんだ。だから一番強い子にしかあげられないんだよ」。女の子は思いました。ほかの子がこのプレゼントをもらったら、その子はつらいだろうな」。そして神様に言いました。「そのプレゼント、私にください。私が一番強い子よ。ほかの子にはあげないで。ほかの子が苦しむのはいやだから。私が一番強い子だから私にちょうだい」。君が来るのを待っていたんだ。君が一番強い子なんだね」

「ねえ、ママ、そうやって神様にお願ひして私は生まれてきたんだよ」お母さんはなみだをながしながらも笑顔で女の子を抱きしめました。

「強い子」というお話ですが、この話は本当の話で、・福島正伸さんが親子に出会って実際に聞いたお話です。子ども達には、君たちはお父さんとお母さんを、実は、選んで生まれてきているんだよ、と言います。この子は誰もがもらえるプレゼントのなかから、重い病気というプレゼントをもらって生まれてきました。君たちが健康でいられるのは、重い病気というプレゼントをもらって生まれた子がいるから。そこには、障害とかいんなものがあつたかもしれない。そういうものを自分で背負って生まれてくる子がたくさんいるんだよ。だから、君たちの周りにそういう子がいっぱいいるよね。だから、障害を持っているというだけで、あの子はおかしいと思ふのはどうなんだろう。そういう子達こそ、君たちの幸せを願ってくれているのかもしれない。みんなそれぞれがいろんなプレゼントをもらってきていると思うけれど、だからこそ、みんなあがみんな認め合つて励まし合つて応援し合つて生きていかなければいけないのね。そういうお話をします。

ひとそれぞれには意味のないことは何にもないんだ。いままで起きているすべての出来事が君たちの幸せのために起きているのだと考えたときに、あのとときにあれが起きたのはなぜだろう、あのとときのあれはなぜだろうと考えたときに、もしかしたら自分は何のために生まれてきたか分かるかもしれない。四十、五十の人でも自分の使命が分かっているひととはそこを見つめたら分かるかもしれない。いまからもっと人生を楽しむことができるかもしれませんよ、などお話ししたりしています。

(音楽終わる)

最後に、家族自慢になるかもしれませんが、僕の言葉というのを聞いてもらいます。

(歌を聴く)・

ボクは毎日お空から見た。パパとママが結婚した日も

パパとママがケンカした日も。パパとママが幸せな日も

そしてボクは決めたんだ。パパとママに会いたいつて。。。

だからボクは思い切つてお空から飛び降りてきたよ！

パパとママの愛情をもらうためにやってきた

ボクはあなたの子供です。あなたにあいにやってきた

寂しそうなママの事励ましたくてやってきた

頑張つてる。パパの事元気にしたくてやってきた

ボクはひとりりで歩けないけれど パ。パとママを笑わせたいな  
泣いてばかりのボクでごめんね 今まだうまく話せなくて

いつかボクが話せるようになったら伝えたいよ  
あの時泣いてばかりのボクに優しくしてくれてありがとう

ボクが言いたかったのはママ笑って！。パ。パ笑って！  
それだけを願ってたんだ 家族になれてありがとう

パ。パとママと生きるためボクはここに生まれて来た  
お空からずっと見えた 頑張って生きてたこと

いっぱい泣いて いっぱい笑って いっぱい心配かけるけど…

ボクだって小さいけれど

パ。パとママをしあわせにしたいとホントに思ってるんだ  
いつもいつでもおもってる

いつもいつでも信じてる。パ。パとママの愛情を

(歌終わり)

学童保育で預かっている子のお母さんが、この歌詞が夢に出てきたんです。作曲をプロのひとにやってもらってCDになっています。販売されてはいませんが、とつてもすてきな歌だと思つてご紹介をさせてもらいました。

お話はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

#### 講演後の質疑応答

#### 暴力の連鎖

参加者 A 雪のなか来ていただきましてありがとうございます。のっけからネガティブな質問ですが、お父さんの暴力のすごい家庭で育つたとお伺いしましたが、自分が親父になったときに同じことをするかもしれないという恐怖心はなかったですか。お話をお伺いしていて、愛情か恐れかというとき、いつも愛情から選択されているような感じがして、うらやましいと思つたのです。

荒巻 すごく反面教師にできたと思うのですね。ちよつとずれるかもしれませんが、弟は家庭暴力の連鎖をしていますし、同じ理由で離婚もしていますし、父と同じことをやっています。中学の時から暴走族で、そういう道を歩んでいます。僕はそういうふうな踏み出せなくて、どつちかというところ「よい子の犯罪」というふうな育ち方をしてるほうで

す。よく道を外さなかったと言われるのですが、僕のなかでは心理的に  
おかしい、自分は精神病、というのですか、ずっと自分はおかしいとい  
う自覚で生きてきました。それで、自分の過去を語ることはまずなかつ  
たです。語った時点でそれらがばれてしまうから、イコール、あのひと  
には近づいてはいけないとなりかねない、ということから、自分の過去  
を隠して生きてきたようなことがあったりするんですね。でも、そうや  
つて、大きく道を外したりすることがなかったのは、なんだろうと考  
えたときに、普通の暮らしの家庭の子とは違って、憎みすぎるほど憎ん  
でいるのだろうと、いま思うのです。余りにも父親を憎んでいるから、  
いつかこいつを、というのを希望にして生きてきたとか、この男を絶対ひ  
ざまずかせるほど幸せな家庭とか大金持ちになつてやるとか、そうい  
う気持ちがあつて強く強かつたので、そういうふうにならなかつたのでな  
いのかなと思うのです。

ところが変わったのは子どもが生まれてからです。子どもが生まれ  
てから、やつていた仕事をどんどん変えていったのです。それはなぜかと  
いうと、子どもに自慢できないというか、この生き方ではお父さんはね  
と語れないと思つたからで、いつか胸張つて、「お父さん、今日仕事どこ  
行くの」と聞かれたときに、「うん、こんなところに行くんや、たくさん  
ひとをええようにしてくるわ」と言えなければいかん、と子どもを見  
て感じました。当時は、やつぱり、ちよつと、反社会的とまではいかな  
くともひとに言える仕事でなかつた、そういうのをずっとやつていまし  
た。子どもにちゃんとと言える仕事を、というのがずっとありました。笑う

家庭を築くことが子どもに愛されるお父さんになることだというのが、  
強い部分としてあつたので、暴力的なところだけでなくて、言葉をかけ  
ることすら憎んでいるところがあつたので、そういうことは一切しな  
かつたです。ところが、それだけ、意識的に、愛してる愛していると来たの  
けれど、余り言いたい話ではないのですが、長男が2歳後半、あるいは3  
歳だつたかときに、本当、反射的なのですが、一瞬にして自分が鬼に  
豹変して、かーつと血が上つて、革靴で顔をけつていたのですよ。子ども  
の顔を。けつた瞬間に妻に「あんた、なにすんの！」と言われ、すーつと  
冷めたのです。わーとなつて、それから、何日も子どもから離れられ  
なかつたですよ。顔を見たらつらくつらくて、何をしてしまったのだろ  
うと。

暴力の連鎖と言われたり、DVだとか、それは別人格が乗つかったり  
するのかなあと。お父さんつて本当はものすごく優しいひとで、どうし  
てもそういうときに鬼が宿るのかな、といろんなことを考えさせられ  
ます。うちの父親は飲んだら暴れるとかでなくて、普段が怖いひとだつ  
たので、普段が怖かつたのです。酒を飲んで暴れるのなら酒を飲まない  
ときは怖くないのですが、そうではなかつた。うちは、飲もうが飲まな  
いが暴れるから怖かつた。

そのとき思つたのです。自分には宿っていると。父の血が宿っていると。  
だから、これから先、同じことを繰り返す可能性があると思つた。そこ  
を意識していました。わーと来る瞬間を自分のなかですごく意識して、  
抑えなあかん、抑えなあかん、と思つていました。

もうひとつ気づかされたのは、学童保育をしていたときに、悪いことをする子どもに対して、何度も何度も言い聞かせる、それでも言うことを聞かないときに、自分がだんだん逆上してきて、「言葉尻があなたのお父さんといつしよだ」、妻に言われたのです。お父さんいつしよだと言われるのが一番苦しいです。わあーとつらくなります。そのとき妻に言われたのが、「スタッフみんながあなたの顔色にピリピリしている」「あなたがそうなったときというのは、何か起こる、スタッフみんながもしかして、となつているのよ」と。そう言われたときに、自分では気がつかなかったなど。自分はそういうところを持つているのだなど。

自分がずっと見てきたものというのは、自分がそうやって学んでしまつているから、子どもに対していらつとしたら、そういうものが出てくるのか、父と同じ追い込み方をしたり、父と同じ言動になつたりするのか、それらは自然と学んだからなど。妻に聞かされて学びました。そういうことは起こしていませんけれど、かーつときときは、自分のなかで、「あかんよ、あかんよ」と抑えている自分があります。

## パパジャングル

**早川** ちよつとプライベートすぎて質問するのがはばかれるのですが、この絵本なんかを見せてもらおうと、奥さんが救世主のような感じがします。いまの話聞いていたら、お子さんをもたれたのいい方向に行く大きな要因のひとつであると思いましたが、奥さんが天からおりて

こられた天使でないかと思つたのですが、いかがでしょうか。おきれいな方です。全面的に受け入れてもらったとも言われていました。

**荒巻** 僕は嫁さんは寺で会つたのですが、寺で会つたときは全然きれいとは思わなかつたですね。彼女は僕と出会つてきれいになつたひとです（爆笑）。彼女を天使のように描いています。いまのじぶんがいるんはまさにそうです。スタッフとしてとか、家族のなかで親として一緒に子育てしているとか、そういうところでは、そんなに天使でないです。僕も、もちろん普通の親です。ただ、僕は天使として発信しすぎていたので、嫁さんとしてもしんどいのです。「あなたより、奥さんの方がすごいね」と言われることが多いのです。

**参加者B** パパジャングルを作られるまでに、いろんなひとが集まつてこられたと思うのですが、そのあたりの話をお聞きしたいのです。

**荒巻** 僕はひとを集めたりするのはすごくへたくそです。僕は福井に来て14年になりますが、最初の5年間は友達か一人もできない引きこもり状態でした。この5年間はひとと接したくないようなことだったので、だからひとを集めるのはとんでもない話でした。そんな自分がなんで、となるのですが、幼稚園時代に接したお父さんがものすごくびっくりして、人間つてこんなに変わるものかと。言葉を発することができなかったものが、いまはしゃべるじゃないですか。パパジャングルを作るときは、幼稚園の先生が一人ずつ声をかけてくださつて、僕は絵本を読みますからと、やつただけなんです。

NPOを立ち上げるには10人必要なんです。これをどうすかといつ

たときに、パ。クラブをやっているひとたちに、いまやっている活動をもつともつと広くやりたいなといったら、10人が手を上げてくれた、それだけなんですよ。ところが、始めてしまうと、僕はそのひと達の役割を作る事ができなかつたです。そのひと達に「何でしないの」と言うばかりだつたので、ひとりぼっちになつたのです、あいつすきなことをやっているばかりだ！と。ほとんどワンマンでやっていた。みんなそれぞれ仕事を持っているのです、ほとんど一人でやってきたような状態です。いまようやくいろいろなことをやって実績を積んでいくなかで、パ。ジャングルの会員を募らなくしたのです。すると、本当の意味で手伝ってくれるひとがいっぱい来ました。いまものすごくたくさんいます。そういうひとたちは会員でも何でもないのだけれど、なにをするにしてもすべて手伝ってくれるので、もうメンバー以上の方という感じで活動させてもらっています。そのなかで唯一のスタッフが学童保育のスタッフです。

### 子どもを預かる

4人の子どもを預かることになつたのですが、この子たちは、授業には出ないし、ひどく乱暴なところがあつたので、教育委員会は登校禁止を決めたそうです。そのことが僕の耳に入ったので、僕は教育委員会のひとに言ったのです。「義務教育において登校禁止はあり得ないです。なぜなら、義務教育というのは子どもが学校に通う義務があるということではなくて、学校に行きたいという子どもに対して親とか大人が

学校に通わせる義務があることですよ。大人から子どもに学校に来るなど言うのは義務教育に完全に違反しています」と。「それほど困っているのなら僕が授業するほうがましですよ」。怒りの状態で言った。「だから子どもが非行に走るのでしょう」。僕が見ますよと言つたので、それでは見てくれますかとなつたのです。それが始まりです。

**参加者C** それから、もうひとつ。そこにもう一人来られていますが、あの方はどなたなのですか(爆笑)。僕は名田庄多聞の会にこれまで何度も出ていますが、照明をしたり消したり、あるいはバックグランド音楽をかけたり、ものすごく効果的で、見ていると先生に共感してやつておられるように思つたのですが。

**荒巻** かれはごく最近参加してくれたひとで、先月小浜で講座を開いたときに、ご一緒させてもらえませんか、と来てくれたのが最初です。今日は2回目です。ご本人さんが社会貢献活動をしたいという希望が強いのでやつてもらっています

### 子どもと外の社会

**早川** 玄関先をきれいにするという先ほどの話ですが、脱ぎっぱなしの靴を職員が片付けると、あとから来た子がきれいになつていたので自分もそうするという説明でした。思うに、それは、ひとと違ったことをするのはまずいという感覚からやつているようにも思うのですが、自分だけそういうわけにはいかないだろうと。大人が片付けなくなつたら

またもと通りになるのでないかと思えます。いい子になってきたと思わない方がいいと感じました。

もうひとつ別の質問ですが、あらじんさんのところに来ていた子ども達はそこにいる間は天国・極楽だと思えますが、でると外には普通の世の中が待っています。そうした世の中に対して、こちらにいたときのハッピーが力にならなければいけないと思えますが、それはどの程度、どうなっているのでしょうか。

**荒巻** 僕は始めて4年しかたつていません。追跡調査をして彼らが10年後どんな大人になっているのか、それはまだ語ることはできないですね。たとえば、プレーパークでの冒険遊びですね。やりたいことを応援する。危ない、汚いを応援するとか、そういう動きは全国的にありますが、それを毎日展開しているのは10数カ所しかないのです。そのようなプレーパークに毎日行っている子はまずいないと思うのです。放課後、今日は久しぶりに行ってみるか、程度だと思えます。

学童保育とプレーパークをひつけた施設は僕のところしかないと思つています。冒険遊びを毎日した子がどう成長するのかを見せることができるのは、僕のところだけだと思つています。親に暴力を振るう子もいるし、幸福な家庭の子もいます。いろんな子が混じるなかで、ひとりひとり抱えている問題が違うなかで、僕はこのような遊びはすべての子にいい方向に働いていると信じてやっています。個々のケースでこうなりましたというのは、いまはとても難しいです。

たとえば、とても難しい子がいるとします。実際います。厳しい家庭、

恐ろしい家庭の子はいます。そういう子の人生を変えようとか、そこまでは自分にはできないですが、いま目の前にいる子をいまこの瞬間笑顔で過ごさせることはできる。いま楽しい、そのようなわくわく感、その積み重ねがその子の未来だと思つています。いま僕にできることをやるしかないのではないかなと思つています。

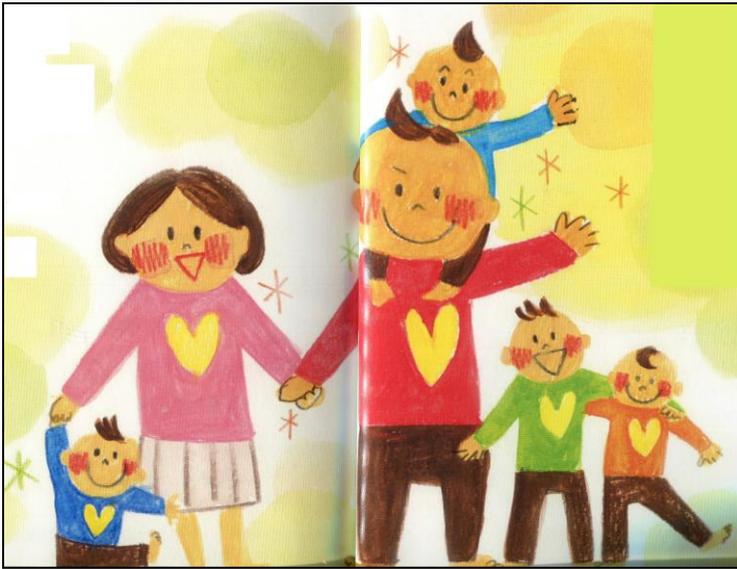
僕の子どもの頃を考えると、その頃の僕を救える大人は絶対いなかった、自信を持つて言える。だから、いまの自分も虐待を受けている子どもを救えると思えない。残念ながら。僕のいないところで起きていることが余りにもつらすぎるから。そこから出してあげなければ救うことができないと思うから、それができない自分にはかれを救えるわけがないと思うのです。ただ、たった一人でもいいからこの子の話を聞いたり、この子のつらいという感情を受け止めるひとがいれば、救うということではないけれど、その子の痛みは和らぐし、感情を受け止めるひとがいることでその子は楽になるだろうとは思っている。

**早川** 明らかに家庭で虐待を受けている子どもを家に戻さない方法はないのですか。そのほうが良いような感じがするのですが。

**荒巻** 僕、自分の経験から言うと、施設に入れて欲しかったです。家族から引き離して欲しかったです。それで施設に入っている子がいると、ああよかったなと思つてしまうのですね。しかし、実際に施設に入っていればもつとつらい思いをしていたかもしれない。それは分からないから、どつちがいいと言える立場でないですが、そういう親の元にいる子はとうてい想像できないようなつらい思いでいることだけは分かる。

## 絵本のなかの4人目の子

**参加者C** 絵本を見せてもらいましたが、その最後に、荒巻さんは実際は3人の子持ちなのにその絵には4人いて、そのうちの一人が肩車してもらっている、この4人目はだれなのでしょうかと、最初に言われましたが、最後の質問でそれは誰なのでしょうかと(笑)



荒巻 肩車してもらっているのは幼少時代の僕です。自殺志願者がいまから死ぬと僕に電話してきたことがあるのですよ。その青年は23歳でした。知り合いでも何でもないのですよ。なぜ、僕に電話してきたかというところ、この絵本を読んだと言うのですよ。同じ環境に生まれ、同じ環境で育ち、もう生きていけないというなかで、アラジンさんだったら話を聞いてくれるかもしれないと思い、最後に話を聞いてもらうつもりで電話したと。そのとき、ものすごく忙しかったのですが、絶対話聞くと聞いて、聞きました。

彼に言いました。この絵本にあるように、むかしは幼少の頃の僕が見えたのだ、しかし、いまは見えない。それはたぶん幸せになったからだと思うと。一年生や二年生と遊んでいるときに、その子達と一緒に遊んでいる自分が見えたのだと。いっしょに遊ぶことで過去の自分が幸せになつていくのを感じることができたのだと。ひとは過去は変えられないけれど未来は変えられる。子ども達が自分の過去を塗り替えてくれたのだと言いました。いつも苦しい苦しいと過去の自分を恨んでいたけれど、その過去の自分がいなくなったのだと。きみ、いま、それほど苦しみのなら、学度保育に行つてアルバイトしなさい。アルバイトさせてもらえないのならボランティアをしなさい、そうやって子ども達と遊ぶと過去の自分はきれいになるかもと言いました。このページの絵は過去の自分も平和になったよ、4人目を育てたのは自分自身だったよというメッセージです。

早川 まだまだ話はあるかとおもいますが、時間になりましたのでこれ

で終了とします。今日は遠方から来ていただきまして、ここから感謝申し上げます。拍手でお礼したいと思います(大きな拍手)。

#### 資料

##### 一・参加者(13名)

岡由美、小野律子、尾花和子、紙本かおり、治部ひろみ  
中嶋喜久子、中野英二、早川博信、早川恵子、早川はつみ  
松尾恵子、宮本美希恵、山本穰

##### 二・発言者(3名)

A(40代、女性)、B(50代、女性)、C(50代、男性)、

(注：前ページの図は絵本から取ったもの。ただし、文字を消したのでバツクの図柄は原本と、少しですが、異なっています)